1/16 琉新

貧困の若い母に寄り添う

己の道（おのれ）

琉球大教授、教育学者
上間陽子さん（48）

研究室の棚に分厚いファイルが並ぶ。琉球大教育学研究科教授の上間陽子（ようこ）さんは二〇一七年から地元沖縄県で、十代で子どもを産んだ「若年出産女性」に会い、インタビューを続ける。ファイルに収まるのは、その時のやりとりを録音し、一字一句書き起こしたデータだ。

「学校からおうちに帰ると、お母さんとどう話していいのか分からなくて、ずっとお山座りをしてた」「自分はさ、小学一年生の時、ももたろうの話知らなかったわけ」。子ども時代を振り返るそんな言葉を目で追うと、少女たちの小さな背中が上間の脳裏に浮かぶ。

地元の人脈をたぐり寄せ、これまで七十六人の若いママから話を聞いた。整理したデータから見える現実は、厳しい。

十四歳ガールズバー、十四歳ピンサロ、十五歳キャバクラ…。仕事を始めた年齢はとても低く、しかも風俗系に行くケースが目立つ。そして、三分の二はDV有り。「イメージで『沖縄はいい場所』とかよく言われますけど、この子たちから見える景色は、全然、そんなものではありません」

上間は二〇一七年にキャバクラや風俗で働く十代、二十代女性数人にインタビューし、その結果を「裸足で逃げる」という著書にまとめた。

多くは、交際相手との間にできた子どもを十代で出産し、その後、パートナーからの暴力を受けていた。男性と別れ、頼りにできる親もいない。

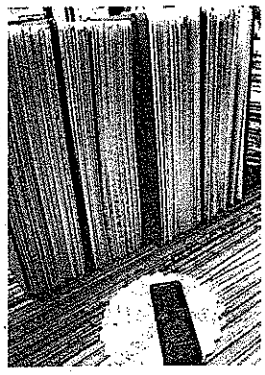
「生活が難もしんどいのは、一人で子育てしながら働く女の子たちだった。それならと、調査のターゲットをキャバクラ・風俗から若年出産女性へ少しずらしてみた」。だが、いざ調査をしてみると、両対象者の間に、大きな違いが見えなかったという。

これまで聞き取った彼女らの過去や現在は、暴力と隣り合わせだった。小学生のころ父親から性暴力を何度も受け、今もうまく眠れない子。パートナーから殴られ、壁に顔面を打ち付けられて骨にひびが入った子。話がひどすぎて、上間はインタビュー帰りの車中、ハンドルを握ったままたびたび泣いた。

当初の調査目的は、どんな家族の元で、どんな学校生活を送りながら育ったかを把握することだった。それが分かれば、シビアな生活を送る子どもたちへの支援方法を考えることができるからだ。だが、上間の活動はそこにとどまらず、彼女らの具体的な生活に介入していった。

心が弱り、掃除ができない子には、腐りかけの食べ物が散乱した部屋を片付けに行った。出産に立ち会う人がおらず、病院のベッド脇で産気づいた子の腰をさすりながら「ひーひーふーふー」と呼吸したこともあった。性暴力で心的外傷後ストレス障害（PTSD）になった女性が通う精神科にも毎回三、四時間かけて同行している。

そこまでしなくても、調査結果を分析し、論文にまとめて社会に問うだけで、研究者としての役割は十分果たしている。ただでさえ、普段の授業や学生たちへの論文指導などの通常業務は手間がかかる。家に帰れば幼い子どももいる。上間の活動の根底にある思いとは、一体何なのか。



インタビューの録音を一字一句書き起こしたデータが収まるファイルの一部＝上間教授提供

聞き取り、時に介入…「状況悪化させない」

「暴力生む文化」直視　皆でより良い場所へ

上間の専門は教育学の「生活指導」。虐待や不登校、非行など、県内の学校からさまざまな相談が寄せられる。そんなポストに就いて十五年以上がたつ。そのため、数年前に学校から相談された児童と、インタビューで対面することもある。

「あの時、学校にいろいろアドバイスしたけれど、変えられなくて本当に申し訳ない。『この子の裏には口うるさい上間がいる』と周囲にアピールして、せめて今よりも状況を悪化させたくない」。それが上間の原動力になっている。

米軍嘉手納基地のそばにある沖縄市・コザで上間は育った。祖父は高校の教員。母親も小学校の教員で、自分も教師になろうと琉球大へ入学。ところが、教育学の面白さにのめり込み、教員採用試験は受けず、東京都立大の大学院に進学した。

院生時代の初調査は都内の女子高で。週一回のペースで三年間通い、生徒の会話や行動を観察した。一九九〇年代後半、ちょうど「援助交際」という言葉がテレビや雑誌に出始めた時期。生徒から妊娠の相談を受けることもあった。

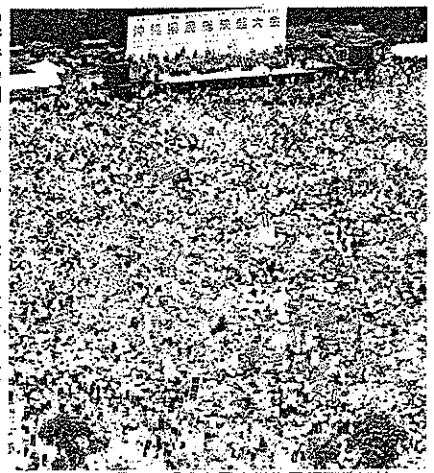
人間がどんな経験を積みながら大人へなっていくのか。そんな学問的関心を抱きつつも、援交や性の話は書くことができなかった。当時、「性を売ることに全く抵抗がないタイプの女性が登場した」などと、一定層の女子高生に好奇の目が向けられていた。

書いたとしても「貧困ポルノ」のような物語として消費されるのが目に見える。上間はそれが嫌で「性が絡む話は書かない」と決めた。三十一歳で琉球大に今のポストを得た後も、夜の街での聞き取りを始めた後も、その決断は揺るがなかった。

転機となったのは二〇一六年四月、うるま市で起きた女性殺害事件だった。ウオーキングをしていた当時二十歳の女性会社員が、元米海兵隊員で軍属の男から性的暴行目的で連れ去られ、殺された。裁判で被告は黙秘権を行使。傍聴した上間には、真実が語られたとは思えない公判内容だった。

一九九五年の米兵三人による少女暴行事件をはじめ、沖縄では、女性の人権を踏みにじる性犯罪が繰り返される。米軍基地のそばで育つ子どもたちは、こうした暴力事件に巻き込まれるリスクが高い。そんなことを改めて考えさせられた上間は「聞いたことを書いて伝えることが教育学者としての使命だ」と覚悟を決めた。

「暴力は、言葉の力が及ばない領域」と上間は捉える。論理は通用せず、強い力で相手をねじ伏せる。普天間飛行場の移設名目で、きれいな辺野古の海を埋め立てるのもそうだ。県民投票や選挙でいくらNOを突き付けても強行される光景は、やめてと懇願しても暴力をふるわれる女性らと重なる。



1995年10月、米兵の女子小学生暴行事件に抗議し、沖縄県内外からの参加者であふれ返る県民総決起大会＝沖縄県・宜野湾海浜公園で

上間は、インタビューで聞いた暴力が、米軍の存在と無縁ではないと感じている。沖縄の特に貧困層に位置する男性にとって、強い者はあこがれの対象だ。米兵は「かっこいい」と受け止められることが多い。「力が物言う『マッチョな文化』に親しみながら育ち、蓄積された経験が暴力に形を変え、より弱い者へ、女性へと還流している」

インタビューを始めた十年前は、彼女らが現状を抜け出すための出口が見えず、途方に暮れることばかりだった。ただ、最近は希望も見える。

安全に生きる場を見つけた子も、勉強に励んで簿記検定に合格した子もいる。上間は、インタビューの記録を必ず彼女らへ渡しているが、つらくなるとそれを読み返し「あの時よりも今は幸せ」と感じて、安眠できるようになったと言う子も。「何となく、少しずつ、みんなより良い場所に来ている」と実感する。だから、上間はこれからも、彼女らの話を聞きに、車を飛ばして会いに行く。

（文中敬称略、石井紀代美）